



日本で最初に見つかった四隅突出型墳丘墓（順庵原1号墓：瑞穂町順庵原 1969年）

写真提供：松任市教育委員会



北陸で発見された四隅突出型墳丘墓（旭遺跡：石川県松任市）

写真提供：倉吉博物館



各隅がツノのように飛び出した四隅突出型墳丘墓（阿弥大寺墳墓群：鳥取県倉吉市）

中国山地から山陰、やがて北陸地域へ「これまで」に発掘された「四隅」の遺構、もっとも古いものは中国山地の広島県三次や庄原などの盆地で発見されたものですが、日本海側の「四隅」は、それよりずっと遅く産出されたものとされています。

「四隅」の造りは弥生時代後期に全盛を迎えますが、このころになると山陰だけでなく、北陸地方の一部でも「四隅」が造られるようになります。「これについては、福

井・石川・富山でも「四隅」が発見されていることから明らかになっています。

なぜこのような広範囲で共通の形をした墓が造られるようになったかについては諸説あり、正確なことはわかっていません。しかし、「四隅」が当時の山陰と北陸のつながりを知るうえで、重要な遺跡であることは間違いないと言っています。

四隅突出型墳丘墓の展開

弥生時代中期の終りごろ、中国山地と山陰平野部で発生した四隅突出型墳丘墓は、弥生時代後期には山陰地方の「首長墓」として発展する。その後貼石や列石が省かれた形で日本海を通じて北陸地方に伝えられ、「北陸型四隅突出型墳丘墓」として広がっていく。



写真提供：佐賀県教育委員会



首をはねられた人骨（吉野ヶ里遺跡出土：佐賀県神埼町・三田川町・東脊振村）
戦いによる戦死者のものと思われられる。



島根県ではじめて発見された高地性集落（陽徳遺跡：安来市門生町）
高地性集落とは、弥生時代中期から後期にかけて発生した高い丘や山の上にある集落のこと。生活には不便な場所にあることから、外敵の侵入を見張ったり、のろしをあげて連絡を取るために作られたと考えられる防御性の強い集落（詳しくは7巻を参照）。

首をはねられた人骨
この時代のお墓から出土する人骨には、首をはねられたものや何本も矢を打ち込まれたものがあり、これも弥生時代に争いごとが多かったことを証明していると言えます。「この時代の日本を記した中国の史書『魏志』倭人伝の中には、『倭国乱れ』という記述がありますが、「これはこの発掘調査でわかった争いごとについて書かれたものかもしれない」。

四隅突出型墳丘墓（以下「四隅」と略す）は、そんな日本の「大乱期」に生まれた当時の有力者を埋めたと思われる墓です。ヒトテラのような形と、墳丘に貼りつけた貼石や裾をめぐる列石が特徴的で、他の地域の墓とはいっぴう違った山陰地方独自の形態をしています。

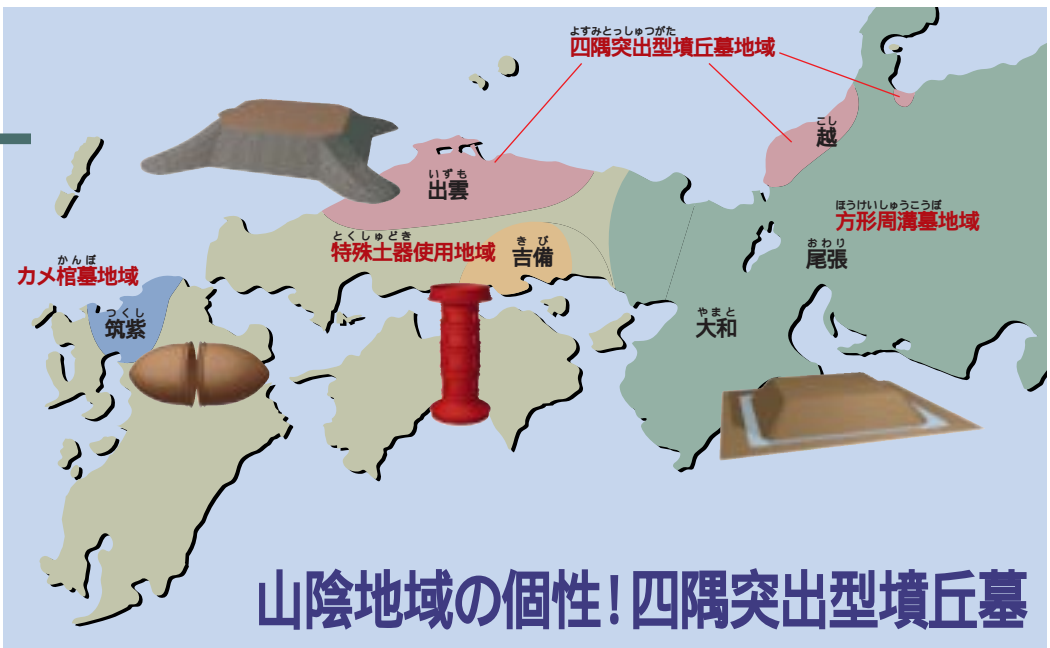
日本の大乱期に生まれた四隅突出型墳丘墓
弥生時代になり農耕社会にはいると、富や権力が生まれ、その結果、人びとのあいだに貧富の差が発生するようになります。

階級の発生が人びとの争いの原因となることは、世界的に見ても共通しています。弥生時代の遺跡を見ると、集落のまわりには必要以上の深い堀をめぐらせたり、生活するには不便な高い山や丘陵上に集落を作ったりしていることから、日本も農耕社会が進むにつれて争いごとが多くなってきたことが考えられます。

この時代のお墓から出土する人骨には、首をはねられたものや何本も矢を打ち込まれたものがあり、これも弥生時代に争いごとが多かったことを証明していると言えます。「この時代の日本を記した中国の史書『魏志』倭人伝の中には、『倭国乱れ』という記述がありますが、「これはこの発掘調査でわかった争いごとについて書かれたものかもしれない」。

弥生時代後期の墓に見る地方色

西日本地域は、朝鮮や中国に近いため弥生時代の先進地だった。ここでは地方の個性化が進み、墓の形や葬り方、祭りの仕方などで、それぞれの地方が独自のスタイルを作り上げた。



- *カメ棺墓
長さ1m近くある特大の2つの土器を合わせて棺として、その中に人を葬る。
- *特殊土器
墓の上に供える土器で、特殊な文様をつけた器台の上に壺を載せて用いる。
- *方形周溝墓
墓地とする場所を四角形に定めて溝をめぐらし、その区画の中に人を葬る。

山陰地域の個性! 四隅突出型墳丘墓

四隅突出型墳丘墓の誕生と広がり

山陰色が萌芽する時代